Title	ハビトゥス論の現代的課題：集団から個人へ， あるいは統一性から多元性へ
Sub Title	Contemporary problems in the theory of habitus: from groups to individuals, or from unity to plurality
Author	村井, 重樹(Murai, Shigeki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2012
Jtitle	哲學 No.128 (2012. 3) ,p.87- 108
JaLC DOI	
Abstract	<p>Bourdieu's Distinction published in 1979, which accounts for the logic of cultural practice, is one of the most important studies to analyze the relation between culture and social structure in sociology today. But, at the same time, it has been criticized in various ways, theoretically as well as empirically, since its publication.</p> <p>In this paper, I will try to critically reconsider Bourdieu's explanation of cultural practices in the light of social conditions today by especially focusing on the theory of habitus. First, we examine individualization theory and cultural omnivorization thesis to catch the macroscopic trend in contemporary society. Second, by contrast with both arguments, I point out some problems with Bourdieu's theoretical premise. Finally, it is claimed that we need to turn the perspective of the theory of habitus from groups to individuals, or from unity to plurality for concretely analyzing contemporary cultural practices.</p>
Notes	特集：社会学 社会心理学 文化人類学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000128-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

ハビトゥス論の現代的課題

——集団から個人へ、あるいは統一性から多元性へ——

村 井 重 樹*

Contemporary Problems in the Theory of Habitus: From Groups to Individuals, or from Unity to Plurality

Shigeki Murai

Bourdieu's *Distinction* published in 1979, which accounts for the logic of cultural practice, is one of the most important studies to analyze the relation between culture and social structure in sociology today. But, at the same time, it has been criticized in various ways, theoretically as well as empirically, since its publication.

In this paper, I will try to critically reconsider Bourdieu's explanation of cultural practices in the light of social conditions today by especially focusing on the theory of habitus. First, we examine individualization theory and cultural omnivorization thesis to catch the macroscopic trend in contemporary society. Second, by contrast with both arguments, I point out some problems with Bourdieu's theoretical premise. Finally, it is claimed that we need to turn the perspective of the theory of habitus from groups to individuals, or from unity to plurality for concretely analyzing contemporary cultural practices.

* 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所

1. はじめに

1979年にフランスで出版されたP・ブルデューの『ディスタンクシオン』は、人びとが日常生活のなかで遂行する文化的実践の論理を探求しようとした理論的・経験的研究である。『ディスタンクシオン』において、ブルデューは、ハビトゥス(habitus)、文化資本(capital culturel)、場(champ)など、彼独特の諸概念を駆使しながら、趣味・ライフスタイルの消費・選択が生みだされる社会的諸条件の解明を試みている。そのなかでブルデューは、場における文化的正統性の序列と社会階級のハビトゥスの対応関係を背景に、文化資本の世代間相続を通じて導かれる社会構造の再生産を描き出した。周知の通り、このブルデューの著作は、その発表以降も現在にいたるまで、文化と社会構造の相互規定性を問う社会学的研究として、いまだ色褪せない主要な参照点の位置を担っている。

しかしながら、その研究が社会学における一定の評価を獲得してきた反面、数多くの批判や反証にさらされてきたこともまた疑いようのない事実である。そのため、これまでも、ブルデューが提示する理論と方法に関する批判的検討や、同様の観点にもとづく経験的な検証が、その妥当性をめぐってさまざまに進められてきたのである。もちろん論者による程度の差があるとはいえ、そこでは、ブルデュー理論に内在する問題点がいくつか指摘され、また経験的事実との相違が見出されるなど、ブルデューの主張がかならずしも全面的に首肯されてきたわけではないということが容易に見て取れる。『ディスタンクシオン』の発表からすでに30年以上が経過し、そのあいだに社会構造の変容が多様なかたちで提起されてきたことを鑑みれば、そのような指摘がなされてきたのも、ある意味とうぜんであるといえる。

本稿は、こうした『ディスタンクシオン』をめぐる展開を踏まえたうえで、現代社会の社会的条件を考慮し、ブルデューが提起する文化的実践の

論理について再考を図ろうとするものである。以下では、まず、現代社会のマクロな趨勢として、とくに理論的には個人化論、経験的には文化的オムニボア論を主たる媒介項とすることにより、ブルデュー理論に内在する前提条件との齟齬を見出すことにする。つぎに、かかる観点にもとづいてブルデュー理論と方法を再検討し、そこに内在する前提条件のいくつかを取り払う必要性を主張する。それは、おもにハビトゥス概念に関わるものであり、そこでは、集団から個人へ、あるいは統一性から多元性へ、という視座転換の重要性を提起することになる。そして最後に、その視座転換がもつ意義を導き出し、ハビトゥス、ひいては文化的実践を理論的に把握するための現代的課題を提起する⁽¹⁾。

2. 個人化論——ライフスタイルと主体像の変容

現代社会のマクロな趨勢を論じる鍵概念のひとつとして、「個人化(individualization)」をあげることができるだろう。個人化論は、現代における社会構造の変容を考察するにあたり、グローバル化論やリスク社会論などととともに、近年の社会学においてすでに重要な位置を獲得しているといつてよい。その概念によってU・ベックたちが提起する現代社会の特徴づけは、家族、労働、福祉など、多岐にわたる研究領域に対してさまざまな影響を及ぼしていると考えられる。しかしここでは、後の議論の補助線とするべく、ライフスタイルの選択とそこで想定される主体像についての考察に照準を絞って簡単に概観することにしたい。

ベックによれば、個人は、伝統社会から近代社会へと移行するなかで、身分、親族集団、教会といった伝統的共同体から解放された。その一方で、近代社会における個人は、階級、核家族、職業集団などの社会形態へと再び埋め込まれることになった。ベックは、従来において近代化として論じられてきた、かかる個人化過程を「第一の近代」と呼び、彼が現代社会の特徴と考える「第二の近代」における個人化と区別している。という

のも、第一の近代において人びとを包摂し、特徴づけてきたそれらの準拋枠が、第二の近代では、すでに自明視できないものになったということが主張されるからである。

身分の代わりにあらわれるのは、もはや社会階級ではない。社会階級の代わりにあらわれるのは、もはや家族という安定した準拋枠ではない。個々人が、社会的な生活世界における再生産単位となっているのだ。(Beck 1986=1998: 142)

こうして第二の近代では、第一の近代において人びとを包摂していた中間集団が溶解し、諸個人はそこからさえも解放される。第二の近代は、第一の近代が残したゲマインシャフトを解体し、個人化を徹底したのである(片桐 2011: 184)。ベックが述べるに、個人が、歴史上はじめて社会的再生産の基本的単位となりつつあり、個人化は、第二の近代社会の社会構造そのものとなりつつある(Beck and Beck-Gernsheim 2002: xxii)。

このため、ここで述べられているように、個人が社会階級や、その枠内に位置づけられる核家族と密接な結びつきを有するという前提⁽²⁾は、自明性を喪失する。なぜなら、「かつては集団で経験された運命は、階級関係が失われた個人化された生活状況においては、まずもって集団ではなく個人の運命となる」からである(Beck 1986=1998: 174)。結果として、社会階級に固有のライフスタイルや文化といった集成的カテゴリーもまた、個人を条件づける際に依拠すべき準拋枠としての位置を剥奪される。

言い換えるならば、これは、個人化されたライフスタイルと生活状況に向かう傾向のために、人びとが自分自身をライフプランと行動の中心にせざるを得ないということを意味している(Beck and Beck-Gernsheim 2002: 31)。以前には、生活条件の共有によって、その結びつきを疑われることのなかった社会階級と文化あるいはアイデンティティの相互連関は

すでに色褪せてしまった。それゆえ、さまざまな選択肢のなかからライフスタイルを選択するという行為を、個人は自分自身で司ることを余儀なくされる。要するに、「個々人は、自分だけを頼りとして、『階級の運命』のさまざまな構成要素を、個々人の人生において初めて発見しなくてはならなかった」ということである (Beck 1986=1998: 155)。A・ギデンズが述べるように、ライフスタイルは、「受け継がれる」というよりも「採用される」ものになった⁽³⁾ (Giddens 1991=2005: 90)。

同様に、かかる社会構造の変容は、主体像に対する認識の変更をとともなう。ベックは、そうした第二の近代における主体を「準主体 (Quasi-Subjekt)」と呼び、第一の近代における主体と異なる像を見ようとしている。片桐雅隆の簡潔な整理によれば、それは、境界の明確な主体から関係の産物としての自己へ、計画者・設計者から文脈の構成要素としての自己へ、そして、自律的な主体からフィクションとしての自己物語の著者へ、という三種の移行から成り立っている (片桐 2011: 186)。というのも、かつて自らを条件づけた準拋棄が解体してしまった以上、主体を取り巻く境界は流動的で多元的となり、他者との関係も文脈依存的にならざるを得ないからである。また、そうであるからこそ、個人は、流動的な社会関係のなかで、自己の同一性を確保するために、自分自身の手によって物語的に生活史を仕立て上げていく必要がある。したがって、ベックからすれば、第二の近代における主体は、「もはや第一の近代におけるような確固とした境界をもつ一義的で無矛盾な主体ではない」のである (伊藤 2008: 319)。

以上、ベックの個人化論を、そこに見出されるライフスタイルの選択と主体像の変容という観点から考察してきた。ただ、ここでひとつ確認しておかなければならないのは、伊藤美登里が注意を促しているように、ベックは、個人化が一様に差異なく全住民に生じていると主張しておらず、経験的には差異が見られうるように、それが時代の傾向を言い表した表現で

あると指摘しているという点である（伊藤 2008: 321）。そこで次に、こうした趨勢の経験的検証の一事例として捉えることもできる文化的オムニボア論に眼を移してみることにしたい。

3. 文化的オムニボア論

3.1 文化的オムニボア—ピーターソンの場合

文化的オムニボア論とは、R・ピーターソンらによるアメリカ社会における音楽趣味 (taste) についての研究 (Peterson 1992; Peterson and Simkus 1992) を嚆矢として経験的検証が進められてきた、文化的実践に関わる一連の研究のことをいう。従来における研究が、古典的にはM・ウェーバーの「身分」概念あるいはT・ヴェブレンの「顕示的消費」概念を源流としながら、近年ではとりわけブルデューの「文化資本」概念に依拠するかたちで、文化的消費や生活様式を地位 (status) の指標として捉えることによって、社会階級間の明確な文化的境界を見出してきたのに対し、文化的オムニボア論は、こうした構図と必ずしも一致しない文化的実践の様態を経験的に描き出しているところにその特徴を有している。

ピーターソンによれば、これまで受容されてきたエリートから大衆へといたる社会的地位のヒエラルキーモデルは、異なるレベルに位置する諸集団によって行われる芸術やレジャーの選択（趣味の選択）について、次のような見方を保持してきた。すなわち、①上位の人びとは、洗練された芸術 (fine arts) とそれに相関するレジャー活動を選択する一方、その他のあらゆる種類の文化的実践をきっぱりと退ける、②中間付近の人びとは、上位の文化を模倣しつつ、そこから派生した (derivative) 作品や活動を選択する、③下位の人びとは、洗練された芸術を退け、センセーショナルな、マスメディア化された娯楽を見境なく選択する、というものである (Peterson 1992: 245-246)。

同様に、この見方は、ブルデューが『ディスタンクシオン』において提

起した、支配階級と正統趣味、中間階級と中間趣味、庶民階級と大衆趣味の関係性に相当するといつてよいだろう。「趣味とは運命的な愛、運命の選択であるが、それは強いられる選択であり、他のあらゆる可能性をまったくの夢想として排除し、必要なものを好きになるしかないようにしむける生活条件によって、生みだされるものなのである」(Bourdieu 1979=1990: 273)。ブルデューは、ここに諸階級間をへだてる文化的障壁の存在を見出し、その境界の維持が文化的正統性を獲得するための主要な賭け金になることを指摘していた(Bourdieu 1979=1990)。このように、社会的ヒエラルキーと文化的ヒエラルキーが、一対一の明確な対応関係を有するという見方を背景として、ピーターソンは、特定のジャンルの文化趣味だけを消費する人びとを、「文化的ユニボア (cultural univore)」と呼ぶ(Peterson 1992: 254; Peterson and Simkus 1992: 170)。

一方で、こうした文化的ユニボアと対照的な人びとを、ピーターソンは、「文化的オムニボア (cultural omnivore)」と呼んでいる。そもそも「omnivore」という英語が、「雑食動物」を意味することからも明らかのように、文化的オムニボアは、特定のジャンルにのみその活動を制限せず、あらゆるジャンルにわたって雑種的に文化趣味を消費する人びとのことを指している。したがって、文化的オムニボアには、各々が属する階級の文化的境界を越えた文化趣味の消費も行うという見方が含意されている。(Peterson 1992: 254; Peterson and Simkus 1992: 169)。

ピーターソンによって、現代では、「文化的ユニボア」と「文化的オムニボア」という二つの類型を必要とすると主張されたのが、先に述べたアメリカ社会における音楽趣味の選好に関する研究においてである。そこで、量的調査の結果に依拠してピーターソンが導き出したのは、次のようなものであった。それはすなわち、社会的ヒエラルキーの下位に位置する大衆が、いぜんとして階級的位置と相関した特定のジャンルの音楽(カントリー、ブルース、ラップなど)をひとつあるいは少数のみ消費する文化

的ユニボアであるのに対し、上位のエリート層が、特定のジャンルに留まらない、階級の趣味を超えた広範囲にわたる音楽（クラシックなどに制限されないその他のあらゆる音楽形式まで）を消費する文化的オムニボアになっているという帰結である。

こうして、文化的オムニボアとエリート層の「選択的親和性 (elective affinity)」(Peterson and Kern 1996: 906) を見出すことができる以上、従来のエリートから大衆へといたるヒエラルキーモデルは、必ずしもすべての階級に適合するものではないといわねばならない。ピーターソンによれば、オムニボアは、状況の要求に応じて、幅広い趣味を見せることにより、地位を掌握する一方、ユニボアは、異なる集団に所属する、ほぼ同じレベルにある他者との差異を確認するために特定の趣味を利用しているのである (Peterson and Simkus: 170)。要するに、広範な文化趣味に通じることが高地位の獲得と強く相関しているのであり、言い換えれば、それが現代社会における地位の達成にとって重要な鍵を握っているということになる。

3.2 文化の二重戦略の使い手——片岡栄美の場合

このようにしてピーターソンが提起した「文化的オムニボア」の問題は、文化と社会構造（階級・階層構造）の関係性を問うにあたり、その後の研究において真摯に受け止められてきたといえるであろう。その証拠に文化的オムニボア化についての経験的な検証が、各国でさまざまなかたちを取って進められてきた (Eijck and Bargeman 2004: 442)。なかでも、ブルデューの文化的再生産論の図式（とくに『ディスタンクシオン』における議論）へと強く引きつけながら、この現代的趨勢を説明しようとするのが、日本社会の文化的オムニボア化を検証してきた、片岡栄美による一連の論考である (片岡 2000; 2003; 2008)。

ピーターソンにならって片岡は、「特定の文化趣味だけをもつ排他的な

志向性」を「文化的ユニボア」, 「威信の高いハイカルチャーから威信の低い大衆文化までの幅広い文化趣味をもつオープンな志向性」を「文化的オムニボア」と定義し, 前者を「文化的排他性仮説」, 後者を「文化的寛容性仮説」として, 日本における階層と文化の関連性を検討している(片岡 2000: 184-185)。そして, 以上の仮説にもとづいた文化活動に関する量的調査によって, 日本社会は, 「ホワイトカラーを中心とした中間層以上において, 正統文化と大衆文化の両方が嗜好されるオムニボア社会である」(片岡 2008: 18) と主張している。この点で, アメリカにおいてピーターソンが見出した文化的オムニボアとエリート層の選択的親和性は, 日本においても同様に見出すことが可能であるといえるだろう。そこで, われわれが確認しておきたいのは, 片岡が文化的オムニボア化を説明するその仕方についてである。というのも, ここに文化的オムニボア論に保持された理論的前提条件が示されていると考えられるからである。

片岡は, なぜハイカルチャー消費者の多くがオムニボア化するのかという点に関して, ブルデューの概念を援用しながら, 以下の二つの観点から説明を行っている(片岡 2000: 208-209)。第一の理由は, 日本では現代のエリートが大衆化戦略をとり文化的な寛容性を示すことに象徴的利益があるというものである。片岡は, 出自の地位が高い文化エリートは, 大衆化戦略を採用することで階層的なルサンチマン(上位者へのねたみ)を回避していると考えられ, とくに会社組織のような多様な人間関係の中で成功するためには, ハイカルチャーを示すのではなく, いかに大衆文化的になれるか(宴会芸やカラオケ)が求められるという。第二の理由は, 文化的オムニボア化の社会的メリットとして, 異質な文化集団と交流し, 多様な社会的場面で活動することを可能にするというものである。さらに同じく, グローバル・ポストモダンの社会では, 文化的複雑性を扱うことのできるハビトゥスが求められるためであるとも述べられる。

片岡によれば, 日本では, ハイカルチャーへの階層的な参入障壁が存在

する一方、大衆文化が階層横断的な共通文化となっているために、「文化の象徴的境界の存在を隠蔽する機能を果たしている」（片岡 2000: 216）。
というのもそれは、庶民階層が主として大衆文化を中心とした文化消費を行っているのに対し、エリートがハイカルチャーのみならず、大衆文化も消費する文化的オムニボアとなって、「文化の二重戦略」を用いているからである。すなわち、エリートは、文化的優位を隠すことで、組織や会社文化に適合・同調し、階層的なルサンチマンを回避する戦略をとっている（片岡 2003: 108-109）。したがって、「現代の文化資本は幅広い文化テイストを示し文化的に寛容となること」（片岡 2000: 214）であり、「現代のエリートに求められる資質とは、多様な集団の文化を理解し、文化的に寛容になれるハビトゥスをもつこと」（片岡 2003: 108）なのである。こうした理由から、片岡は、ブルデューの文化的再生産論の理論前提が日本では成立しないとも述べている（片岡 2008: 15）。

しかし、オムニボア化したエリート層を「文化の二重戦略の使い手」と捉えることを理由に、それがブルデューの理論的前提と相容れないと考えるのは、果たして妥当な見方であるといえるだろうか。すでにブルデューは、「文化の二重戦略」が意味することとほぼ同じ論理を、「恩着せがましきの戦略 (stratégies de condescendance)」と呼んで、以下のように説明していた。

わたしが「恩着せがましきの戦略」と呼ぶのは、[許容] 限界を象徴的に侵犯するという、例の侵犯行為でして、これのお陰で規定＝定義に適っていることから得られる利潤のみならず、侵犯することから得られる利潤をも一挙両得できるわけですが、それは貴族階級のものが馬丁 [作法知らず、という侮蔑語でもある] のお尻をポンとたたいたりする場合で、そうすると《あの人はシンプルだ [=お高くとまらない]》などと評されるものですが、これは貴族階級の人間にしては、

つまりその本質からして優越していて、その本質として原則的にそんな振る舞いに及ぶまじき人間にしては、ということ暗に意味しています。(Bourdieu 1982=1993: 152 [] 内は訳者)

このように、行為者が戦略を通じて二重の象徴的利益を得るとみなすためには、本来において各階級の人びとがそれに応じた文化的実践を行うという対応関係が含意されていなければならない。なぜなら、ブルデューが述べている通り、「原則的にそんな振る舞いに及ぶまじき人間にしては」という前提があらかじめ組み込まれていなければ、ここで示されるような戦略それ自体が、象徴的な有効性を持ち得ないと考えられるからである。

また、その前提は、片岡がオムニボア化を、つねに人びとの寛容性の問題として捉えていることにも如実に表れている。そこでは、人びとの趣味の選好に関わるオムニボア化・多元化の論理が説明されるというよりも、エリート集団に固有のハビトゥスが暗黙のうちに措定され、それ以外の集団のもつ異質な文化趣味に対して寛容であるのか否かが問われているのである⁽⁴⁾。いずれにせよ、これらの点を鑑みれば、文化的オムニボアを「文化の二重戦略の使い手」と捉える見方は、ハビトゥスの集団的固有性を前提として保持しているという意味で、いぜんとしてブルデューの説明図式の枠内に留まっているといえることができる。

4. ハビトゥス論の現代的課題——集団から個人へ、あるいは統一性から多元性へ

たしかに、こうした文化的オムニボアの消費スタイルは、ブルデューの提示する文化的実践のスタイルと異なっている。以上で概観した文化的オムニボア論は、その階層論的意味を、経験的検証を通じて明らかにしてきたといえる。しかしながら、その反面、文化的オムニボアの実践を理論的に把握する方法については、議論が不十分であるといわざるを得ない。と

いうのも、ブルデュー理論の定式化から捉えきれない文化的実践が見出されているにもかかわらず、従来ではその前提の枠内で説明することに終始してきたように思われるからである。別言すれば、この問題提起を踏まえたうえで、ブルデューの理論的・方法論的視座を再検討する試みが、なおも満足になされていないということになろう。したがって、ここでは、ブルデュー理論に対する文化的オムニボアの存在意義を汲み取りながら、その前提条件についての問い直しを図り、現代的な文化的実践を把握するための理論的課題を導き出そうとする。

では、文化的オムニボアの消費スタイルは、ブルデューのもつ理論的前提といかなる点で矛盾をきたすと考えられるのだろうか。ブルデューが述べる次の言葉は、その点を考察するうえでの手がかりとなるだろう。

社会的位置の空間は、性向（あるいはハビトゥス）の空間を媒介とした位置取りの空間のうちに具体化して現れる。あるいは言葉を換えれば、社会空間の主要な二つの次元においてさまざまな位置を決定する示差的な隔差の体系にたいしては、行為者（または構築された行為者集合）の諸特性同士、すなわち彼らの実践や彼らが所有している財同士の、示差的な隔差の体系が対応しているということです。位置の集合の各々にたいして、それらの各集合に対応する存在状態に結びついた社会的条件づけの産物であるハビトゥス（あるいは趣味）の集合が対応し、さらにこれらのハビトゥスと生成能力を媒介として、たがいにスタイルの親近性によって結びつけられている財や特性の体系的な集合が対応しているのです。ハビトゥスという概念の機能のひとつは、ある単独の行為者ないしは行為者集合のさまざまな実践や財を結びつけるスタイルの一貫性を説明することにあります。……ハビトゥスとは、ある位置の内在的・関係的な諸特徴を統一的なライフスタイルとして、つまり人間や財や実践に関する選択の統一的な全体として

具体化する、この生成・統一の原理なのです。(Bourdieu 1994 = 2007: 24)

この引用にもとづくかたちで、文化的実践を把握するに際してブルデュー理論が前提とする主要な条件を二つ指摘できるだろう。それは、①社会的位置とハビトゥス (position と disposition) が対応し、かつ各々が集散的に把握されるという点、②ハビトゥス概念が実践 (ライフスタイル) の統一性あるいは一貫性を説明するものとして定義される点、である。この意味で、文化的消費とライフスタイルに関するブルデューの見方は、基本的に、構造的相同性 (structural homology) とハビトゥスの二つの概念によって構造化されているともいえる (Coulangeon and Lemel 2007: 94)。くわえて、文化的オムニボアの問題は、ブルデュー理論に内包される、かかる前提条件との齟齬に密接に関わっていると考えることが可能である。それゆえ以降では、これらの論点に絞った考察を通じて、ブルデュー理論に見出されるいくつかの前提条件を取り払う必要性を主張し、その視座を転換することの意義と展望を提示することにした。

4.1 集団から個人へ

ここでいう構造的相同性とは、「社会的な階級構造が同型的関係 (isomorphic relation) によって審美的選好の構造と結びつくという仮定」(Coulangeon and Lemel 2007: 94) を指している。すなわち、ブルデューにおいては、各々の場 (champ) で遂行される実践が、行為者のハビトゥスを媒介に、全体的社会空間における階級的位置と相同的に捉えられるということだ。もう少し具体的に述べるとすれば、趣味の場でなされる人びとの位置取りが、ハビトゥスの作用を通じて、階級的位置と相同的に結びつくかたちで現れるということである。

とうぜん、その見方においては、ブルデューが、行為者の位置とハビ

トゥスの対応関係を集合的に把握していたことも非常に重要な意味をもっている。それは、ブルデューが、「社会空間に様々な範囲を画定することによって作り出される諸階級は、生活条件の点からだけではなく、文化的実践、消費、政治的意見などの点で、きわめて均質な行為者を集合させる」とみなしているからである (Bourdieu 1994=2007: 37)。換言すれば、ブルデューのいう行為者とは、結局のところ、個人であると同時に集合体であり (Lash 1994=1997: 282)、より正確には、諸階級に固有の均質なハビトゥスを身体化した個人である。

このように簡単に概観しただけでも、ブルデューによるハビトゥスの規定が、文化的オムニボアの行う実践のスタイルに適合しないことは明瞭である。そこで見出される行為者には、すでに集団固有の均質なハビトゥスが措定されているがゆえに、文化的オムニボアが行うような階級の枠内に留まらない実践を分析の射程に収めることが困難であるといわざるを得ない。であるならば、そうした文化的実践を理論的に捉えるために、いかなる認識の変更が必要とされるのだろうか。ここでは、そのひとつの試みとして、上述のように集団レベルで捉えられてきたハビトゥス、ひいては行為者を、個人レベルで捉え返してみるという見方を提起しておくことにしたい。この視座転換を図ることによって、ブルデュー理論、とりわけハビトゥス論の視点からオムニボア化・多元化した文化的実践に対して新たにアプローチする可能性が開かれると思われるからである。

ただし、ブルデュー自身の立場からすれば、この方法に対して、必ずしも十分な賛同を得られないかもしれない。そのことは、N・クロスリーによる次の指摘が的確であろう。「ハビトゥスは具体的な社会的ネットワークのなかで相互行為によって形成される。しかしながら、ブルデューはときに、それを『相互行為主義者』と退けて、この説明を受け入れることに躊躇しているように見える。彼は、位置と性向のより直接的な結びつきを提起しているのである」 (Crossley 2006: 93)。このことが抱える問題点に

については、次節で確認する。

さらに付言しておけば、片岡はいうまでもなく、ピーターソンらの研究にいたっても、その考察レベルは、集団の範疇に収まっていたといえるだろう。B・ライールによれば、エリートのある多様な文化趣味の存在を明らかにすることは、エリート成員たちの「オムニボアな」性格を証明していない。というのは、集団レベルでの文化的多様性は、多元的した小規模の下位集団あるいは断片化した「ユニボアな」集団の存在を示しているだけかもしれないからである (Lahire 2008: 184)。要するに、同一の個人が多元的な実践を遂行しているかどうかは、集団レベルでの考察に留まっているとは明らかにならないのであり、この点を明確にするには、個人レベルにまでその分析の視野を広げる必要があるということである。

4.2 統一性から多元性へ

集団レベルではなく、個人レベルにおいてハビトゥスを考察することは、クロスリーの指摘に示されているように、それを「具体的な社会的ネットワークのなかで相互行為によって形成される」ものとして捉えることにほかならない。行為者は複雑な社会関係の網の目のなかに編み込まれており、そこにおける諸経験を通じてハビトゥスを身体化する。ブルデューが人びとの形成するハビトゥスを階級集団のもとに回収する傾向をもっていたことを考えれば、これがハビトゥスを均質的に把握する方法に対して向けられた批判であることもまた同時に理解できるだろう。諸個人の具体的な社会的ネットワークのなかでハビトゥスを捉えることは、むしろそこに矛盾や異質性を見出す仕方と大きく関わっているといえるのである。

もしかすると、こう述べれば、ブルデューが『自己分析』のなかで、学校世界と社会的出自の隔たりを通して形成された自分自身の「分裂ハビトゥス (habitus clivé)」(Bourdieu 2004=2011: 155) について語ってい

たことを思い起こすかもしれない。しかし、その点に関して、T・ベネットは次のように指摘している。

その主張は、ブルデューが別のところで、文化的消費の実践を組織する一連の規則的な原理としてハビトゥス概念について語らねばならなかったことと鋭く対照をなす。というのも、ここでブルデューはいつもハビトゥスの統一性を主張していたからである。かかるハビトゥスの構築は、ブルデューの『ディスタンクシオン』の分析的構成にとって重要である。それは、個人レベルの分析と階級レベルの分析が、ライフスタイルの社会空間の内で統合され、さまざまな場にもたがる文化資本の働き (operation) が媒介される、主たる概念的な蝶番を構成している。それゆえ、もしハビトゥスの統一性が維持できないことが示されるならば、この研究においてブルデューのアプローチがもつ他の側面もまた疑問視されるのである。(Bennett 2007: 201)

ここに示されている通り、ブルデューが自らの「分裂ハビトゥス」について語っているからといって、『ディスタンクシオン』のなかで、それが適切な理論的位置を与えられているということにはならない。それは、ブルデューが、構造的相同性の論理によって導かれる実践のスタイルの統一性を見出していたこと、そして、その関係性を媒介するのが、階級固有の均質なハビトゥスであったことから明らかである。要するに、「ブルデューの議論の重要な側面は、ハビトゥスの発生図式が、統一された一連の諸性向を産出するように、単一の転移メカニズムを通して、さまざまな場を横断して当てはまるという主張である」(Bennett et al. 2009: 26)。構造的相同性の論理は、こうしたハビトゥスの働きによって支えられ、そうであるがゆえに、すべての領域(場)で文化的実践の統一的なスタイルを生みださせるのである。

一方で、文化的オムニボアの実践のスタイルを考慮するならば、このようなかたちでブルデューが前提とする文化的実践の統一性は、とうぜん普遍的に妥当するものとみなすわけにはいかなくなる。階級の枠組みを超えて行われる多元的な文化的実践は、この前提と相容れず、そもそもその分析の射程から外れてしまっている。それに対し、具体的な社会的ネットワーク、すなわち諸個人の複雑な社会関係の網の目のなかでハビトゥスが生成されるという視点は、こうした文化的実践の多元性を分析の視野に収める可能性をもつ。というのも、ライールにしたがえば、それによって次の二つの見方を導き出すことができるからである。①われわれの社会において、諸個人は異質で、ときに矛盾さえする社会化の経験にさらされているため、複数の性向、嗜好 (partiality)、能力の保持者となっている。②これら同一の諸個人は、必ずしも同一の条件のもとで、つまり同一の行為の文脈のなかで、行為するよう駆り立てられるわけではなく、したがって、性向、嗜好、能力の点から見た彼らの個人的遺産は、多様な誘因にさらされている (Lahire 2008: 185)。つまり諸個人は、社会化の条件に応じて、矛盾や異質性を内包したハビトゥスを身体化しているものであり、それぞれの領域との関係性しだいで、多元的な文化的実践を生みださうということである。いうまでもなく、それはブルデューのように集団レベルから個人のハビトゥス、ひいては文化的実践を一様に、統一的に把握するものではない。

さらにいえば、かかるハビトゥス把握の仕方は、ある意味、文化的オムニボア論で提示されるような文化資本概念と符合する側面をもつ。なぜなら、ベネットらが述べるように、『『クロスオーバーする』趣味と実践を理解することが、文化資本の現代的説明を発展させる重要な特徴である。そのことは、特定の集団にもっとも緊密に結びつく文化的趣味と実践だけでなく、特定の集団をまたぎ、架橋する実践に焦点をあてる」(Bennett et al. 2009: 28) からである。ただ、文化的オムニボア論は、現代的な文化

資本を「幅広い文化テイスト」と述べるだけに留まっており、その内実の分析にいたってはいまだ多くの曖昧さを残しているといわざるをえない。したがって、これまでの文化資本概念に含意されてきた統一性ではなく、多元性が文化的実践を把握する際の主要な争点となるならば、今後はその構成要素についても、よりいっそう具体的な考察が進められなければならないであろう。そしてこのとき、集団レベルから個人レベルへの視座転換が、あわせて文化資本概念の再考へとつながる可能性をもつということが出来る。それは、社会的条件に応じるかたちで矛盾や異質性を含みうるものとして捉え返されたハビトゥス概念が、文化資本の伝達条件や構成要素を鮮明に浮かび上がらせることを要請するからである。多元化した文化的実践を把握するには、今後こうした文化資本の分析がなおいっそう不可欠なものとなるに違いない。

5. おわりに

以上のように、本稿は、現代社会のマクロな趨勢として、理論的には個人化論、経験的には文化的オムニボア論を媒介に、ブルデューの理論における前提条件との齟齬を見出すことにより、文化的実践の論理を探求するための現代的課題を提起することを試みてきた。ここで示したように、集団から個人へ、あるいは統一性から多元性へというかたちで、ブルデュー理論、とりわけハビトゥス概念が有するいくつかの前提条件を取り払おうとすることは、現代社会の文化と社会構造の相互規定性を把握するに際して重要な存在となりつつある、多元的な文化的実践を遂行する人びとを、適切にその分析の視野へと収めようとする企図にほかならなかった。本稿の視座転換は、この分析可能性を追求する糸口のひとつとなりうるものである。

また、本稿の考察をより広範な社会学的文脈に置き直すならば、こうした視座転換の問題は、現代社会において「社会的なもの (the social, le

social)」や「主体または行為者」をどう位置づけるのかという問題に接続する。なぜなら、個人化論で見たように、第一の近代で前提とされてきた中間集団や集合的カテゴリーが、もはや自明な準拠枠としての位置を剥奪されたのであれば、現代社会における「社会的なもの」とは何か、そこで見出される「主体または行為者」とはいかなるものなのか、という問題があらためて浮上して来ざるを得ないからである。すなわち、個人と社会の結びつきが、現代社会の社会的条件のなかでどのように再把握されなければならないのか、という大きな問いである。したがって、これまでのところで本稿が提起してきた視座転換は、かかる現代社会学の課題に応答するためのひとつの方策として捉え返すことができ、このことは、ハビトゥス概念を立脚点としてブルデュー理論の現代的展開可能性を見出していくための足がかりの位置を担いうるといえるであろう。ただ、この見方をブルデュー理論の既存の枠組、とりわけ場の概念のような構造的側面のなかに、どのようにして位置づけ直すのかという課題は、いぜんとして残されたままになっているとつけ加えておかねばならない。

本稿で行ってきたハビトゥス概念をめぐる問題提起は、もちろん、上述した展開可能性を切り開く出発点にすぎないとはいえ、現代社会における文化的実践の論理を把握するための理論的方向性を考えるうえで、主要な争点となりうるにふさわしい課題であるといっておいてよい。しかしながら、本稿は、こうした課題を摘出するのみに終始せざるを得なかった。そのため、これら現代的課題に対する理論的・経験的検証が、今後の研究のなかでさらに進められねばならないことを確認するに留めて、ひとまず稿を閉じることにしたい。

註

- (1) 本稿は、拙稿（村井 2010）で十分に述べるができなかった、現代社会の社会的条件について議論をより詳細に論じ、そこで展開された考察を補充

- するものとして位置づけられる。それゆえ、議論の内容に関して部分的に重なるところがあることを、あらかじめお断りしておきたい。
- (2) たとえば、この点についてベックはこうも述べている。「階級は核家族を想定し、核家族は性役割を想定し、性役割は男女間の分業を想定し、男女間の分業は婚姻関係を想定している。階級はまた、核家族的状況の集積と考えられており、こうした核家族的状況は、互いに類似した、他の階級に特有な「家族状況」（たとえば、上流階級の家族状況のように）と明らかに区別できる」(Beck 1994=1997: 31).
- (3) ギデنزは、この条件に関して次のように述べている。「ハイ・モダニティにおいて個人が対峙する選択の複数性は、いくつかの流れから生じるものである。第一に、私たちはポスト伝統的秩序において生活しているという事実がある。複数選択の世界において行為し、それに関わるということは、伝統によって確立された道しるべがもはや存在しない状況において、代案を選ぶということである。……二つ目は、バーガーが「生活世界の複数化」とよぶものである。……ライフスタイルの選択肢はしばしば、他の可能性を犠牲にした上で、その特定の領域へと没入するという決断である。……選択の複数性を条件づけている第三の要因は、モダニティにおいては保障された信条が文脈依存的な性質を持つてしまうことの、実存的なインパクトである。……第四に、媒介された経験の流布もまた、明確にかつ精妙に選択の複数性に影響を与えている」(Giddens 1991=2005: 91-94).
- (4) この場合、「オムニボア性 (omnivorousness) は、総称的な (generic) 性向、すなわち社会的かつ文化的に定義され、伝達される『コスモポリタンな』ハビトゥスとして解釈されうる」(Coulangeon and Lemel 2007: 108) といえる。

参考文献

- Atkinson, Will., 2007, "Beck, Individualization and the Death of Class: a Critique." *The British Journal of Sociology* 58(3): 349-366.
- Beck, Ulrich., 1986, *Risikogesellschaft Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Surkamp. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局)
- Beck, Ulrich and Beck-Gernsheim, Elisabeth., 2002, *Individualization: Institutionalized Individualism and its Social and Political Consequences*, Sage Publications.

- Beck, Ulrich, Giddens, Anthony and Lash, Scott., 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity Press. (=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化——近現代の社会秩序における政治, 伝統, 美的原理』而立書房)
- Bennett, Tony., 2007, “Habitus clivé: Aesthetics and Politics in the Work of Pierre Bourdieu.” *New Literary History* 38: 201-228.
- Bennett, Tony, Mike, Savage, Elizabeth, Silva, Alan. Warde, Modesto, Gayo-Cal and David. Wright, 2009, *Culture, Class, Distinction*, Routledge.
- Bourdieu, Pierre., 1979, *La Distinction: Critique sociale de jugement*, Les Editions de Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン——社会的判断力批判 I・II』藤原書店)
- , 1982, *Ce que parler veut dire: L'économie des échanges linguistiques*, Arthème Fayard. (=1993, 稲賀繁美訳『話すということ——言語の交換のエコノミー』藤原書店)
- , 1994, *Raisons pratiques: Sur la théorie de l'action*, Editions du Seuil. (=2007, 加藤晴久・石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳『実践理性——行動の理論について』藤原書店)
- , 2004, *Esquisse pour une auto-analyse*, Raisons d'agir. (=2011, 加藤晴久訳『自己分析』藤原書店)
- Coulangeon, Philippe. and Lemel, Yannick., 2007, “Is ‘Distinction’ Really Outdated?: Questioning the Meaning of the Omnivorization of Musical Taste in Contemporary France.” *Poetics* 35: 93-111.
- Crossley, Nick., 2008, “Social Class.” Grenfell, Michael. (ed.), *Pierre Bourdieu: Key Concepts*, Acumen: 87-99.
- Featherstone, Mike., 1995, *Undoing Culture: Globalization, Postmodernism and Identity*, Sage Publications. (=2009, 西山哲郎/時安邦治訳『ほつれゆく文化』法政大学出版社)
- Giddens, Anthony., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社)
- 伊藤美登里, 2008, 「U.ベックの個人化論——再帰的近代における個人と社会」『社会学評論』59(2): 316-30.
- 片桐雅隆, 2011, 『自己の発見——社会学史のフロンティア』世界思想社.
- 片岡栄美, 2000, 「文化的寛容性と象徴的境界——現代の文化資本と階層再生産」今田高俊編『日本の階層システム 5 社会階層のポストモダン』東京大学出版

- 会: 181-220.
- , 2003, 『『大衆文化社会』における文化的再生産——階層再生産, 文化的再生産とジェンダー構造のリンケージ』宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力——反射するブルデュー』藤原書店: 101-35.
- , 2008, 「芸術文化消費と象徴資本の社会学——ブルデュー理論からみた日本文化の構造と特徴」『文化経済学』6(1): 13-25.
- Lahire, Bernard., 2004, *La Culture des individus: Dissonances culturelles et distinction de soi*, La Découverte.
- , 2008, “The Individual and the Mixing of Genres: Cultural dissonance and self-distinction.” *Poetics* 36: 166-188.
- , 2011, “Preface to the English edition.” in *The Plural Actor*, Polity Press: viii-xix.
- 三上剛史, 2010, 『社会の思考——リスクと監視と個人化』学文社.
- 宮島 喬, 1999, 『文化と不平等——社会学的アプローチ』有斐閣.
- 村井重樹, 2010, 「諸個人のハビトゥス——複数の諸性向と文化的実践の諸相」『年報社会学論集』第23号: 176-187.
- Olivier, Michèle., 2011, “Revisiting Distinction: Bourdieu without Class?” Alan Warde (ed.). *Cultural Consumption, Classification and Power*. Routledge.
- Peterson, Richard, A., 1992, “Understanding Audience Segmentation: From Elite and Mass to Omnivore and Univore.” *Poetics* 21: 243-258.
- Peterson, Richard, A. and Albert, Simkus, 1992, “How Musical Tastes Mark Occupational Status Group.” Michél, Lamont and Marcel Fournier (ed.), *Cultivating Differences: Symbolic Boundaries and the Making of Inequality*, University of Chicago Press: 152-186.
- Peterson, Richard, A. and Roger, M. Kern., 1996, “Changing Highbrow Taste: From Snob to Omnivore.” *American Sociological Review* 61: 900-907.
- Van Eijck, Koen and Bargeman, Bertine, 2004, “The Changing Impact of Social Background on Lifestyle: “Culturalization” instead of Individualization?” *Poetics* 32: 439-461.